

大澤 壽人プロフィール

1906(明治39)年8月1日、兵庫県神戸市生まれ。父は神戸製鋼所創業時からの技術者、母はクリスチャン。幼時からキリスト教に囲まれて育ち、20年関西学院中学部入学。山田耕柝が籍をおいたグリークラブで活躍し、25年初来日したフランスのピアニスト、H.ジル＝マルシェスの神戸公演に感銘を受け、作曲家を志した。26年高等商業学部進学。ピアノを在留外国人、ロシアのA.ルーチンとスペインのP.ヴィラヴェルデに師事。神戸オラトリオ協会を設立して自ら指揮者になるなど、関西学生音楽界で知られていた。

1930年関西学院卒業、宣教師らの勧めによって渡米。ボストン大学音楽学部で正式に作曲を学び始めた。32年日本人初の作曲専攻生としてニューイングランド音楽院にも入学。F.コンヴァースに師事した頃から才能が一挙に開花した。

ボストンは当時の世界的な音楽最先端都市で、ボストン交響楽団定期演奏会に登場したA.シェーンベルクや周囲にいたアメリカ急進派からの影響を受け、「交響4部作」と呼ぶべき作品を圧倒的な勢いで作曲。日本最初期の《ピアノ協奏曲》(33年)、バレエ組曲《3つの田園交響楽章》、日本初の《コントラバス協奏曲》、屈指の大作《交響曲第1番》(34年)で総

譜枚数500超。無調を取り入れながら「ウルトラモダン」を目指した作品群は、戦前の日本洋楽史に燦然と輝いている。

また、1933年にはボストン響(ボストン・ポップス・オーケストラ)を率いて自作《小交響曲》を披露。新進作曲家・指揮者として注目を集め、指揮者のS.クーセヴィツキに認められた。同響を指揮した初めての日本人であり、ボストンは、生涯に数多くの「日本初」を打ち立てた大澤のスタート地点となった。

1934年大志を抱いてフランスに渡り、エコールノルマル音楽院でP.デュカのクラスに出席、N.ブーランジェのプライベートレッスンを受ける。35年コンセール・パドゥール管弦楽団を指揮して、パリで日本人初の自作自演の大演奏会を開催。J.イベールや「フランス六人組」のA.オネゲルなど、西洋音楽史の巨匠たちが来場した。《交響曲第二番》《ピアノ協奏曲第二番》、歌曲《桜に寄す》は新聞各紙で絶賛され、指揮も高く評価され、華麗なパリデビューを果たした。大戦前のヨーロッパで「欧米楽壇で通用する一流の作曲家・指揮者」と称えられたキャリアは、邦人作曲家が海外進出を模索した時代に、輝かしいの一語に尽きる。

1936年帰国。凱旋のはずの帰朝演奏会で先鋭の作風が理解されず、日中戦争下の38

年に発表した《ピアノ協奏曲第3番 神風協奏曲》は、「愛国的」でないと批判された。戦局の悪化に伴い、活動の場をコンサート会場からラジオや映画、宝塚や松竹の舞台へと余儀なく移すが、このことが逆に、幅広いジャンルの開拓につながり、詩人・画家・映画監督などの豊かな交流が始まった。かたわらで、神戸女学院の教壇に帰国翌年から立ち続けた。

戦中も創作力は旺盛で、1940年の「紀元二千六百年」に関連した「奉頌3部作」、《交響曲第3番 建国交響曲》《海の夜明け》《萬民奉祝譜》を発表。ラヴェル《クーブランの墓》の指揮本邦初演も戦中に行っている。

1945年以降、音楽による戦後復興を目指し、上質で親しみやすい「中間層の音楽」の普及に努めた。49年の《ペガサス狂詩曲》を頂点に、それぞれの楽器の日本初作品である《サクソフォン協奏曲》(47年)や《トランペット協奏曲》(50年)には、ジャズの要素が前面に打ち出されている。これらはNHK大阪放送局や朝日放送で担当していた毎週の音楽番組から流れ、さらに番組用に、欧米で認められたオーケストレーション技術を磨き、作曲に匹敵する「編曲の世界」を築き上げた。

並行して、ポップス系オーケストラ3団体を設立。1952年には《大佛千二百年祝典譜》で

民間放送連盟音楽賞などを受賞、朝日放送1周年記念《電波へのハレルヤ》を発表するなど、超人的な活動を展開。53年には2万人の聴衆が集う西宮球場で「たそがれコンサート」を陣頭指揮、メノッティ《電話》を本邦初演、脚本まで手掛けた放送オペラ《邯鄲》を発表。時代の寵児として多忙をきわめた。

その最中、1953(昭和28)年10月28日に47歳の若さで急逝。作曲・編曲を合わせ1000近くの膨大な作品を遺した。欧米楽壇で活躍できる実力を持ちながら戦争に阻まれ、総作品のうち、演奏会用の多くを作曲したポストン時代の「交響4部作」のいずれも、自身で初演を聴くことのない運命だった。

没後は半世紀以上忘れられた存在だったが、21世紀になる頃、音楽評論家片山杜秀氏と神戸新聞記者藤本賢市氏による「発掘」と尽力によって、再脚光を浴びた。奇跡的な「平成の復活劇」がブームを起こす中、2006年に大澤家は3万点に及ぶ遺品資料を神戸女学院に寄贈。見上げるような業績が明らかにされて、ようやく全貌が現れた天才作曲家である。

生島美紀子(大澤資料プロジェクト代表・音楽学)